山口市へのまなざしとその受容
――The New York Times “2024年に行くべき52カ所”をめぐって――

桑畑洋一郎

1　はじめに
1.1　研究の背景

2024年1月9日にThe New York Times紙（以降NYTと表記する）により、“2024年に行くべき52カ所”が発表された。その中で3番目に山口市が取り上げられ、注目を集めることとなった。NYTの紹介記事においては、

> 山口はよく「西の京都」と呼ばれるが、それよりもずっと面白く、しかも“観光公害”に悩まされることが少ない都市である。瀬戸内海と日本海に挟まれた狭い谷間にある、人口約19万人の小規模な都市である。完璧な庭園と見事な五重塔を持つ、国宝瑠璃光寺がある。この都市の曲がりくねった小道からは、様々な体験が得られる――洞春寺の境内にある水ノ上窯、LOGやCOFFEEBOYのような粋な喫茶店や、原口珈琲のような古くからの喫茶店（中略）がある。京都は観光客でごった返しているが、山口は、京都の祇園祭に比べると小規模だが同じように歴史がある夏祭りを、600年もの間提供してきた。パレードや衣装、踊りが特徴的なその祭りは7月に開催予定で、2024年はコロナ禍以前と同規模のものに戻ることとなっている（The New York Times 2024）[1)]。

とされ、「観光公害」にまだ浸食されておらず、にもかかわらず京都に引けを取らない歴史的建造物や、特有の魅力的な小規模店舗があるとされた。この記事は国内でも大きく報じられ、例えば朝日新聞では（『朝日新聞』2024.1.1朝刊，社会総合面）、

> 米紙ニューヨーク・タイムズ（NYT）は（中略）「2024年に行くべき52カ所」を発表した。日本からは山口市が選ばれ、観光客が多数訪れる京都よりも「観光公害（tourism pollution）」が少ない、歴史ある街として紹介されている。（中略）山口県の村岡嗣政知事は10日、「びっくりしたし、とてもうれしく思う。山口の魅力にようやく世界が気づき始めたな、と。（室町時代に守護大名として治めた）大内氏の素晴らしいコンセプトでのまちづくりが今に残る魅力を、世界の方々に感じてもらいたい」と話した。

とされた。上記の知事コメントにも表れているように、山口県・市側もこれを機会に世界的に山口（市）をアピールし、海外の観光客を誘致することで、山口県・市の地域おこしを図ろうとし始めた。詳細は後述するが、思いがけず世界的な注目を集める機会を得た

ことによって、停滞気味である地域を振興させようと、山口が動き始めた。

1.2　問題の所在と研究の意義

しかしながら、以上のような、世界的な注目を基盤にして山口（市）が高揚していることに対しては、社会学的にそもそも問われるべき点がいくつかあるように思われる。

第1に、山口市に対して世界的に注がれたまなざしの意味についての問いである。「“観光公害”に悩まされることが少ない」といったことや店舗等が注目されているが、それは山口市以外の都市にも存在する。にもかかわらず、殊に山口市が注目されたのは、山口市のどの要素においてなのか。またそうした要素への注目から、山口市に対するいかなるイメージがいかに形成されているのか。後述するように、観光社会学・観光人類学においては、観光対象の地域に対する観光客のまなざしと、そこから形成されるイメージが、観光対象の地域が元々有していた“実態”と必ずしも一致するとは限らないこと、にもかかわらず、まなざし／イメージが観光対象の地域の“実態”を徐々に作り上げることが指摘されてきた（須藤 2017: 21-24）。こうした指摘を踏まえるならば、NYTの記事を発端に世界的に注がれたまなざしが、山口市のイメージと“実態”の形成にどう寄与したのか探ることも必要な作業となる。

第2に、こうした動きがどのように地域に受容され、どのような施策が実際に導き出されようとしているのかという問いである。まなざしを注がれたからと言って何かの変化が生じるとは限らないし、仮に何かの変化が生じるにしても、まなざされる側のまなざしの受容のあり方によっても、変化は規定される。特定の地域にまなざしが注がれた際に、そのまなざしがどう受容され、どう変化しようとしているのか探ることも意義あることであろう。

1.3　先行研究

では、本研究はどのような研究体系の中に位置づけられるのだろうか。

当然ながら、NYTによる“2024年に行くべき52カ所”そのものの研究はほぼ存在しない。また、2023年に同企画で盛岡市も紹介されているが、その件についての先行研究も、管見の限り存在しない。またさらに言えば、“2025年に行くべき52カ所”も2025年1月に発表され（The New York Times 2025）、富山と大阪が紹介されているが、この企画そのものへの研究もない。2024年の企画において山口市が紹介されたことの経済効果を経済学者が算出するといった試み（『朝日新聞』2024.5.朝刊，山口全県，地方面）や、まちづくりに向けて山口（市）の魅力を再発見しようとする論考（安村 2024）は出てきているが、まだ蓄積はない。

他方、観光において、観光対象の地域に特定のまなざしが注がれることと、その意味についての研究は、主として観光社会学・観光人類学の領域で蓄積されている。

例えば鈴木里奈（2023）は、「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンに起源をもつ、「故

郷」の観光対象化と、それにより「ノスタルジックな農村が切り取られることで、生まれ育った土地ではない農村に対しても、故郷のイメージが付加された」ことを指摘する。またそうした形態の観光は、「観光者による真正性の探求」を目的とした観光の一類型であることも指摘している（鈴木 2023: 8-12）。

また既に言及した須藤廣（2017）は、「ダークツーリズム」に注目し、そうした新しい形態の観光が、「自然的（だと言われている）『大きな物語』」の観光表象から、「『虚構的』な観光表象を求めるポストモダン型」へと変化していく中で登場したものであると指摘した。「ダークツーリズム」においては、「人間の理性や力によってはどうにもならないことがら、すなわち『他者なるもの』への憧れ、その吸引力が存在して」おり、「『現実消費』型ツーリズム」の一様態であるとされる。ただしここで消費される「現実」とは、あくまでも括弧付きのものであり、「『現実』は表象の介入を伴った解釈の結果成立する（中略）いかにも『なまの現実』だと感じられるもの」にすぎない。それは「ダークツーリズム」に限らず、アニメツーリズムなどのコンテンツツーリズムや、特定の地域を「下町」として楽しむ散歩型観光も同様であるこれらの様態の観光において観光者は、「『虚構』としての（自らの経験が元になっている『記憶』とは異なるノスタルジーとしての）（中略）イメージを『なまの現実』にかぶせてゆく」ことで、「なまの現実」を消費することとなる（須藤 2017: 10-23; 岡本 2013）。

このように、ある地域に、必ずしも生活する人々の「現実」と一致するわけではないまなざしを注ぐことにより、その地域の特定の一側面を――また場合によってはその地域には存在しない「虚構」を――「現実」として消費する観光のあり方が、観光社会学・観光人類学から指摘されてきた。

また同様の問題意識の下、観光地をはじめとした特定の地域をめぐるイメージ形成を分析した研究は、カルチュラル・スタディーズの領域においても存在する。例えば多田治（2004）は、沖縄に対する南の楽園イメージが、開発・交通・観光の動きと並行したメディアからの発信によって形成されてきたものであることを喝破している。また、万国博覧会が特定の地域や民族・人種、あるいは国家に対するイメージを形成してきたことも、やはりカルチュラル・スタディーズの領域から指摘されてきた（吉見 1992）。

このように、特定の地域に対し、そこを訪問する者――多くの場合は観光客――から何かしらのまなざしが注がれることがしばしばあり、そうしたまなざしは必ずしも当該地域で生活する者にとっての「現実」と一致するわけではなく、にもかかわらずそうしたまなざしによって当該地域の「現実」が形成されていくことが、多方面から指摘されてきていると言える。本研究もこうした、観光とまなざしをめぐる一連の研究と同様の問題意識に立ち、山口（市）に対してNYTの記事が発端で注がれているまなざしの意味と、その受容のあり方を見ながら、そうしたまなざしが、山口（市）をどのように形成しようとしているのか考察することとしたい。

2　分析

ここからは、1.2で示した2つの観点から分析を進めることとする。なお本研究では、NYTの“2024年に行くべき52カ所”の記事及びそれに関連する文書や、山口市議会・県議会の会議録を対象とし、そこで提示されたもの同士を突き合わせながら分析を進めていきたい。

2.1　山口市に注がれたまなざしはどのようなものか

冒頭で引用したように、山口市が「行くべき52か所」に選定されたのは、「“観光公害”に悩まされることが少ない」といったこと、あるいは魅力的な小規模店舗の存在が根拠とされていた。しかしそもそも、そういった要素を持つ都市は他にも多数ある。また、記事中で言及されている、瑠璃光寺やCOFFEEBOY等の魅力の内実まで説明されているわけではない。NYTのこの企画に山口市を推薦したCraig Modは、「カフェ」ではなく喫茶店（kissa）に強く魅力を感じているようだが（Mod 2024a）、これらのどこに魅力が見出されたのか。

Modは、山口市長の伊藤和貴との対談において、以下のように語っている。

> 私が思う良いまちとは、「商店街や個人、特に若者が営むお店が元気なまち」、「気持ち良く散歩ができるまち」、「歴史の響きがあるまち」、「大自然と向き合えるまち」、そして、レコードの“B面”に隠れた名曲があるように、東京や京都が“A面”だとしたら、「“B面”に収録された名曲のような隠れた魅力があるまち」です。山口市には、それらが全て揃っていました。（中略）今日もここへ来る前に散歩をしながらいくつか市内のお店に入りましたが、みんな温かく対応してくれました。山口市の住民からは、そんな温かさや心の余裕を強く感じるのです。（山口市 2024: 2-3）

つまりは、「お店が元気」で「気持ちよく散歩ができ」、「歴史の響き」があり、「大自然と向き合え」、かつ住民の「温かさ」を感じられることが「良いまち」の条件であり、そうしたまちは、「“A面”」である東京や京都と対比される、「レコードの“B面”」的な「隠れた魅力」を有していると評価している。ではなぜそうした点が魅力として評価されるのか。

Modは、市長の「洗練された観光客は、いかにも“観光地”といったところではなく暮らす人の豊かな日常の様子を見て、楽しむということでしょうか」（山口市 2024: 3）という問いを受け、以下のように回答する。

> そうですね。そういった観光客は、日常生活やその国の文化と静かに向き合い、深みを感じ、住民との会話や挨拶を交わすなど「オーセンティック（本質的）な経験」を求めています。旅をする目的は、実はそこにある。有名な観光地に行くことが全てではないのです。山口市は、そういった「オーセンティックな経験」をするには非常

に向いています。混雑が起こっている観光地ではそれが難しくなっています。（山口市 2024: 3）

つまり、先に挙げたいくつかの「良いまち」の条件は、「いかにも“観光地”」（市長発言）といったところでは味わえない、「日常生活」、あるいは「住民との会話や挨拶」を通した「オーセンティック（本質的）な経験」が可能となるものと位置づけられている。また、そうした「オーセンティック（本質的）な経験」は、「混雑が起こっている観光地」では得難いものでもある。こうした点から、「“観光公害”が起きていない」山口市が推薦されることとなったことがうかがえる。なお、Modも用いる「オーセンティック」概念は、「本質的」と訳されているが、この文脈では、人類学のAuthenticity（真正性）概念を踏まえて（鈴木 2023）「真正な」とされるべきものであろう。

ともあれ以上のように、山口市にまなざしを注いだ側の視点においては、上記のような、山口市の有する“真正性”とそれを象徴する諸々の物や事象に魅力が見出されていると言える。さて、Modにとっての“真正性”を、もう少し掘り下げてみたい。Modは、上で引用した山口市長との対談後、山口（市）の“真正性”を自身のエッセイで以下のように述べる。

この「真正性」という言葉は、明確な定義なしによく使われます。私にとっては、静かに、ある場所の文化や人々に向き合い、関わることを意味します。「真正性」の経験はどこでも起こり得ますが、混沌とした環境では難しい場合があります。京都の伏見稲荷を真正なかたちで訪れることはできますが、おそらくそれは、観光客の群れが押し寄せてじっくり見ることが不可能になる前、早朝の時間だけでしょう。五重塔（瑠璃光寺の:筆者注）は現在、改修工事のため屋根がかかっていますが（皮肉なタイミング!）、工事が行われておらずこの古い木造建築物に注目が集まる時には見逃してしまうような、塔の周辺に目を向けることができる素晴らしい機会です。今は静寂に包まれているため、山口の人々の暮らしを眺めたり、塔のすぐ前にある山口市そのものを「真正」に体験したりすることが、これまで以上に簡単になっています。（Mod 2024b）[2)]

Modにとっての“真正性”は、「観光客の群れ」によって「混沌と」はしていない状況における、人々の生活より見出されるべきものである。したがって、瑠璃光寺の五重塔が改修工事中であることは、人々の暮らす地域に目を向けるための、むしろ「素晴らしい機会」となる。翻って五重塔そのものはModにとって“真正性”を見出す対象とはされていない。

このModにとっての“真正性”を踏まえるならば、要するに山口市は、観光地化されることのないそのままの状態で、既に“真正性”を有していることとなる。したがって、Modは、以下のようにも述べている。

山口市長と山口知事は私に、今後山口市はどのように変わっていくべきだと思うか

と尋ねました。私は、変化ではなく持続可能性、そして山口市のような都市が今のまま繁栄できる社会的政治的な基盤が維持されることが大切だと伝えました。（中略）観光客の利益のためにあからさまにねじ曲げたり、曲げたりすることではないのです。日本のいわゆる「ソフトパワー」の 1 つは、（中略）世界中の多くの観光客に健全な統治と生活の原型を提供することです。（Mod 2024b）

すなわち、人々の生活を保つような「社会的政治的基盤」を「持続可能性」をもって維持することこそが、山口市の“真正性”の源泉である、人々の生活の保持と充実につながることになる。「変化」は求められない。ちなみにModは、日本在住経験を通して、日本の社会保障制度の手厚さに強く感銘を受けていると、いくつかのインタビューで明言している[3)]。

なお、市長と知事にこうしたことを伝えたことには戦略があったとModは述べる。Modは、「行くべき52カ所」に選定されたという契機が、Modと山口市の人々の生活にとってより良い形で結実することを意図して、市長・知事と対談したとする（Mod 2024b）[4)]。

2.2　まなざされた山口（市）はそれをどのように受容したか

続いて、前項で見てきたようなまなざしを注がれた側の山口（市）が、そうしたまなざしをどのように受容したのか、首長および地方議会議員の反応を、県議会及び市議会の会議録を通して見ていくこととしたい。まなざしを注がれた側の反応を見るうえで、一般市民の受容のあり方や言及された人々の反応、あるいはまちづくりを直接的に担っている団体等の反応を見るといったことも必要ではあろうが、ここでは、当該地域の施策の方向性を決定する役割を担う、首長および議員の反応を基に、受容のあり方を見ていくこととする。

2.2.1　山口市はどのように反応し受容したのか

まずは山口市の受容のあり方を見る。NYTで紹介されて初めての市議会（予算審議）において、市長は以下のように述べている。

本市への注目が高まる中、とりわけ外国人観光客の皆様への受入環境やおもてなし対応の強化が急務と考えているところでございまして、観光案内所をはじめ、観光ガイドや地域通訳案内士等による多言語対応の充実、観光地におけるインターネット環境の整備や飲食店、お土産店等におけるキャッシュレス決済設備の導入支援、大内文化特定地域内の交通手段の充実など、受入環境の整備に向けた取組をスタートいたしたところでございます。また、国宝瑠璃光寺五重塔の令和の大改修に併せて、香山公園で実施いたしておりますライトアップとプロジェクションマッピングにつきましては、ニューヨーク・タイムズ紙の発表後のタイミングとも相まって、市内外からたく

さんの皆様に訪れていただき、多くの好評のお声を各方面からいただきましたことから、開催期間を当初の1月28日から3月31日まで延長いたしますとともに、終了時間も午後8時から午後9時までに延長いたしたところでございます。（中略）このたびの選出は、まちの風情や情緒、さらには人の温かみなどを本市の魅力として評価いただいたものと認識いたしており、その着眼点への気付きをいただいたよい機会になったものと受け止めております。（山口市議会 2024）

以上のように、NYTで紹介されたことを受け、外国人観光客向けの「受入環境やおもてなし対応の強化」や、瑠璃光寺五重塔の「ライトアップとプロジェクションマッピング」の期間延長といったことを行いながら、観光振興を企図した施策を打ち出していくとした。

さらに予算編成方針を受け、議員が質疑を行うこととなる。一般質問においてNYTに言及したものに限定して取り上げると、例えば椙山俊哉議員は以下のような質疑を行っている。

山口市の自然あふれるまちなみや市民の皆様の生活ぶりなど、ふだん着の山口市、あるがままの山口市がニューヨーク・タイムズ紙に評価されたものであり、山口市民にとって、まさにシビックプライドの醸成につながるものと私は考えております。（中略）想定される波及効果とシビックプライドの醸成の観点を踏まえ、これまでの取組と今後の施策展開の方向性について市長のお考えをお伺いします。（山口市議会 2024a）

NYTの記事を踏まえて、それが山口市民の「シビックプライド」の醸成につながりうること、ゆえにそのための取り組みを展開していく必要性を指摘している。ただし同議員は、NYTで山口市が紹介される以前から「シビックプライド」に注目する質疑を行っている。すなわちこの論点が、NYTでの紹介によって新規に提示されたものではなく、同議員の持論のようなものであると言えよう。傍証として、例えば2022年の令和4年第4回定例会（3日目）でも同議員は、以下のような質疑を行っている。

安全対策の第一歩として、山口市に存在する橋梁の状態に関する情報を広くタイムリーに収集するため、山口市を愛する山口市民にシビックプライド――つまり自分自身が地域のまちづくりに関わっているという責任感の発揮を促し、自分たちの地域の安全を自分たちで守るための協力を仰いではいかがでしょうか。（山口市議会 2022）

他にも同議員は、2023年の令和5年第1回定例会（3日目）でも「シビックプライドの醸成」の必要性に言及する質疑を行っており（山口市議会 2023）、NYTの記事以前より同議員が持論としていた提案が、NYTの記事を契機として再度示されたものと言えよう。

なお同様に、NYTに言及しながらも、過去の質疑と同様の、持論的な論点を提示した議員は他にも複数存在する。あるいはまた、以前から議会で取り上げてきた阿東地域のことをNYTの記事に合わせて取り上げた山見敏雄議員や、同様に以前から問題を指摘してきた嘉川・阿知須地域のことを取り上げた山本浩二議員等[5]、NYTの記事に関連付けながら記事中では直接言及されていない地域を質疑で取り上げた議員もいる。筆者が集計したところでは、同記事に言及した議員15名の内、それまで提示したことのない新規の論点を質疑で示した議員は4名に留まる[6]。

このように、NYTから山口市の何かしらの魅力「への気付きをいただいた」と市長が表現したこととは異なり、山口市が紹介されたことを契機に、各議員が以前から持論的に提示してきた論点が改めて提起されていることがうかがえる。

2.2.2　山口県はどのように反応し受容したのか

続いては、山口県の受容のあり方を見ていくこととする。前項と同様に、山口県議会の議事録を通して、県議会においてNYTの記事に言及した発言を取り上げていきたい。県知事はNYTの記事に言及しながら、予算編成の方針を以下のように述べている。

> この絶好機にインバウンドのさらなる誘客促進を図るため、海外メディア等を活用したプロモーションや羽田空港、東京駅など首都圏等の主要交通拠点における積極的かつ効果的な情報発信を行います。さらに、（中略）観光周遊バスの実証運行等により県内周遊につなげるとともに、航空会社や鉄道会社のMaasサービスと二次交通事業者等との連携を促進します。（山口県議会 2024a）

以上のように知事は、NYTで紹介されたことを受け、山口市よりもより広域で観光振興を進める方策を打ち出し、「インバウンドのさらなる誘客促進」を訴えている。またちなみに、この予算編成方針が打ち出されるよりも前の記者会見において知事は、瑠璃光寺五重塔の「外壁シートの一部を透明パネルに取替」（山口県 2024）ることを述べてもいる。

こうした方針の提示を受け、市議会と同様に県議会議員たちが種々の質疑を行うこととなる。例えば髙瀬利也議員は、以下のような質疑を行っている。

> 初めに、物産振興の取組強化についてお尋ねします。（中略）先般、ニューヨークタイムズに山口市が取り上げられたことから、今は、国内外で本県の注目度も高まっていますので、物産振興についても大きなチャンスであります。首都圏における観光物産展の開催や、本県のアンテナショップ、おいでませ山口館を核とした情報発信の強化など、時代のニーズに沿った新たな手法で、スピード感を持って柔軟かつ積極的に取り組む必要があると考えます。（山口県議会 2024b）

髙瀬議員の場合は、「物産振興の取組強化」の文脈で、「首都圏における観光物産展の開催」等、国内での山口県産品への需要喚起を企図し、山口県に注目が集まっていることの傍証としてNYTの記事を取り上げている。なお髙瀬議員は、前年は産業観光委員会に所属し、同委員会での議論においても「県の物産展」「おいでませ山口館」の後押しを提起するなど（山口県議会 2023)、元々この点に関心を強く持つ議員であると言える。

また、笹村直也議員は、以下のような質疑を行っている。

> 山口市がアメリカの有力紙ニューヨークタイムズが発表した2024年に行くべき52か所で、世界各地の旅先の中で3番目に取り上げられました。今後はさらに増加すると見込まれるインバウンド需要の対応としても期待されます。最近話題になっている中学校の部活動地域移行において、旧町村や中山間地域に住む子供たちの移動手段の確保にも資するかもしれません。私の地元の萩市は観光地ではありますが、タクシーの台数は激減し、日曜や夜間はめっきり見かけることも減りました。（中略）知事におかれては、（中略）ライドシェアについて、基本的には検討を進めるべきとの認識を示された上で、いろんな移動の仕方、多様な選択肢があるというのが目指すべき方向だろうと思うと述べられました。（中略）既に一部地域では自治体やNPO法人が運営主体となって、一般のドライバーが送迎する、自家用有償旅客運送のサービスが展開されています。この制度については、今後、自治体をまたいだ運行などについて、各首長の判断でかなり柔軟に運用できるようになります。地域によって、こうしたサービスの必要度合いは異なりますが、自治体によって取組状況に大きな差異が出ないよう、県として自治体間の調整や指導に力を発揮していただきたいと思います。（山口県議会 2024c）[7)]

つまりは、NYTの記事に言及しつつも、笹村議員自身の「地元の萩市」の「タクシー台数の激減」状況を改善するような方策を提案し、それが「中学校の部活動地域移行において、旧町村や中山間地域に住む子供たちの移動手段の確保にも資するかも」と別様の効果を生む可能性があることも提示している、というわけである。

以上のように、NYTの記事が県議会で言及される場合も、市議会の場合と同様に、言及した議員が元々関心を持つ持論的論点に引き寄せられることや、言及した議員の「地元」と関連付けられた発言がなされていた。

3　考察

以上のように、NYTで山口市が紹介されたことそのものと、それを受けて山口（市）が動いている状況を見た上で、それらから考察できることをいくつか述べていきたい。

3.1　発信と受容のずれ

まずもって指摘されるのは、そもそものNYTの記事や、さらにそもそものModが発信する山口市の魅力たる“真正性”と、山口市・山口県側の施策案との間のずれである。

既に見たように、Modが注目しNYTに取り上げられた山口市の“真正性”は、人々の生活より見出されるべきものであり、瑠璃光寺五重塔のような観光シンボルから見出されるべきものではない。またModは、山口市がNYTの記事に取り上げられ、施策に波及することの危険性も見越しており、「変化ではなく持続可能性」を重視し「観光客の利益のためにあからさまにねじ曲げたり、曲げたりすること」への警鐘を鳴らしていた。

にもかかわらず、市・県において施策案として出てくるものは「観光客の利益」優先の観光振興策により、山口の現状を変更しようとするものであった。瑠璃光寺の五重塔が改修工事中であることをむしろ好機としたModの指摘があるにもかかわらず、県は改修パネルを透明化したし、市もModの指摘からずれるような観光振興を進めようとしている。またさらには、Modのそもそもの注目とは無関係な、発言者自身の持論への牽強付会的提案や、議員の地盤に関連する地域への予算投下を求めるような提案もされていた。

以上のように、NYTで紹介されたことは、注目・紹介の理由となった山口市の魅力そのものを保持する方向にではなく、山口市及び県、あるいは各議会議員の施策案により、山口（市）を変化させる方向に波及することとなっている。この点において、Mod及びNYTの発信と、山口市及び県側の施策案から見える受容のあり方には、ずれが生じている。

3.2“真正性”を再度検討する

以上のように、発信と受容にはずれが存在し、ずれたままで施策案が提示されることとなっている。ただしかし、そもそもModが見出した、山口市の喫茶店や小規模店舗に存在する“真正性”はいったいどういうものなのか。Modが注目するのは、山口市内にある喫茶店等であり、確かにModが“真正性”の源泉と位置づける「山口の人々の暮らし」や「商店街や個人、特に若者が営むお店が元気なまち」を象徴するものではある。とは言え、「山口の人々の暮らし」が営まれる場は当然ながらほかにも多種多数存在する。ここにはModの、何かしらの基準に基づく、より“真正”なものをめぐる選抜が働いていると思われる。Modが「カフェ」ではなく喫茶店（kissa）に着目するのも、そうした、何かしらの基準に基づく選抜がゆえであろう。ではそうした基準とは、いったいどのようなものなのか。

Modは、2020年に出版したエッセイで、喫茶店の魅力を以下のように述べている。

> 喫茶店は、琥珀の中にいる蚊のように、特定の瞬間に固定されている。西暦と異なり天皇の代位によって定められる日本の暦は、2019年の5月に令和となった。令和の前には平成があり、昭和があった。喫茶店は昭和と切っても切れない関係にある。（中略）『名古屋の喫茶店』の著者で喫茶店の専門家である大竹敏之に名古屋で教えてもらったところでは、（中略）全国で15万軒の喫茶店があったらしい。（中略）3年前にはそれが7万軒を割り込んだ。多くの店のオーナーは引退の年を迎えており、子どももいない。

古典的な喫茶店はもはやこの世に存在しなくなりつつある。（Mod 2020: 24）

つまりModが喫茶店に見出した“真正性”とは、それが「昭和と切っても切れない」とする、ノスタルジックな感情から導き出されるものであったと思われる。またそうした“真正性”は、「もはやこの世に存在しなくなりつつある」ものであり、だからこそ価値がある。

こうした、存在しなくなりつつある「昭和」的なものに“真正性”を見出し魅力を感じるModのまなざしは、上掲引用文以外の個所からも見出すことができる。Modは同書にて「シャッター街」という題で次のような文章を記している。

日本の主要な商店街に立ち並ぶ店舗は、閉店時には重い金属製のシャッターで守られている。（中略）10年前や20年前は活気があったものの過疎化した町は、「シャッター街」と呼ばれるようになった。（中略）シャッター街の子どもたちは、活気のある都会へと逃げていく。シャッター街はゴーストタウンである。（中略）私はシャッター街を楽しんでいる。日本では、町や村が廃墟になったような場所でも、犯罪を気にすることなく楽しむことができる。（Mod 2020: 58）

Modが山口市も含めた日本の小規模都市に向けるまなざしは、こうした、廃墟化しつつある街並みから過去を想像することを楽しむことで成立している。またModが魅力を感じる「山口の人々の暮らし」とは、「もはやこの世に存在しなくなりつつある」もの、あるいは「廃墟」化しつつある街並みから感受されるものを指しており、それ以外の部分から感受されるものとはなっていない。Modのまなざしには、まさに「『虚構』としての（自らの経験が元になっている『記憶』とは異なるノスタルジーとしての）（中略）イメージを『なまの現実』にかぶせてゆく」（須藤 2017: 23）作用が存在している。NYTの記事そのものからは、こうしたModのまなざしは後景に退いているが、その根源たるModのまなざしをたどると、そこでは「廃墟」化するものへのノスタルジーが働いており、さらにそこから見出されたものこそが山口市の“真正性”であったと言えよう。

3.3　思わぬ形での帰結

以上のように、NYTでの紹介を受けて、山口市・県側が進めようとする施策案においては、紹介した側が求める現状維持ではなく観光振興が進められようとしており、その点で元々紹介した側の意図とはずれがあった。一方で紹介した記事のそもそもの発端であるModにおいても、現状維持を求める趣旨の根源には、「なまの現実」とはずれた、廃墟化する山口（市）へのノスタルジックなまなざしがある点も見えてきた。

発信と受容にはずれがあり、発信の根源にもまた別種のずれがあったわけである。ではこうした複数のずれの中で、山口（市）はどのように変化するのか。結論から言えば、「なまの現実」とずれたまなざしが向けられようと、それをさらにずれた形で受容した施策案

が展開されようと、結局のところ、山口（市）に大きな変化は生じることはないと思われる。

2024年の年末に、NYTによって取り上げられたことで、山口市を訪問した外国人観光客数が1.5倍に増加したことが、全国ネットのテレビ番組「めざまし8」で放映されることとなった（FNNプライムオンライン 2024）。これを見ると一見、Modの意図通りの現状維持とはならず、NYTで紹介されたことで山口（市）が活性化した／してしまったように見える。しかしながら、日本全体での訪日外客数を見ると、2023年は22,332,235人、2024年は33,379,900人となっており（日本政府観光局 2024）[8)]、約1.5倍となっている。つまり山口市のみならず、日本全体で外国人観光客数が伸びたのであり、山口市は日本の中では平均的な位置にいるに過ぎない。また、NYTで取り上げられたことによる経済効果も89.9億円に上るとされているが（『朝日新聞』2024.5.朝刊，山口全県，地方面）、日本人観光客も含めて増加すると想定される観光客数が91.2万人であることを踏まえると、観光客1人当たりの経済効果は1万円に満たない。経済効果がないわけではないが、かなり小規模のものであると言えよう。この点においても結局のところ、NYTの記事が山口（市）にもたらす変化は小さい。

一方で、NYTの記事を受けて提案された施策案についても、これが山口（市）を大きく変化させることもないと思われる。既に見たように、提案された施策案の多くが、提案者の持論的な施策案の実現や、地盤となる地域への予算投下を求めるものであった。つまりは、NYTで取り上げられようと取り上げられまいと、こうした施策案が示されていた可能性は高く、これもまた結局のところ、これまでの山口（市）を変化させるに至ることはない。

以上より、Modの想定したものとはまた違った仕方ではあるが、Modの望み通り、山口（市）の現状は維持されていくこととなると思われる。

4　おわりに

以上のように、NYTによって紹介されるという思わぬことから、山口（市）が地域振興に改めて動き出している現状を分析すると、第1に紹介のされ方と受容がずれており、紹介の意図とは異なり変化が進められようとしていること、第2にそもそもの紹介の基盤をなすまなざし自体も、山口（市）の特定の「現実」を外部からのノスタルジーによって切り取るものであり、「なまの現実」とはずれていること、第3に、そうした複数のずれがある中にあっても、山口（市）は現状とさほど変わらず維持されていくであろうことが見えてきた。

世界的なまなざしを注がれ注目を集めたことで、山口（市）の関係者が高揚している状況にあるが、高揚した結果出てくるものは、結局のところ、それまでと変わらず地盤としている地域の振興や、以前からの持論の現実化のための予算投下を誘導しようとするものであった。また、同じく、関係者が高揚している現状を招いた発端となったまなざしも、外部から向けられたノスタルジックなものにすぎず、実際のところ何ら新鮮味はない。地

方自治体における施策の決定も、観光客の向けるまなざしも、いずれにしても“元々そういうもの”でしかないとも言えよう。“元々そういうもの”であるがゆえに、帰結としては山口（市）の現状は変化することなく維持されていく。

ただし、大した変化が生じないとはいえ、注がれたまなざしやそれに基づく施策案の意味を検討することは重要であろう。結果は変わらずとも、そのプロセスが顧みられることで得られるものはある。こうした、プロセスの検討にも、社会学の役割は存在するのであろう。

［注］

1) 筆者訳による。
2) 筆者訳による。これ以降参照するCraig Modの文章についても同様である。
3) 例えば、アウトドア用品メーカーのThe North Faceのインタビューでは、国民皆保険の重要さに言及している（https://window.goldwin.co.jp/tnf/special/window/letter/craig-mod/）し、不動産大手のSUUMOのインタビューでも、アメリカと違い日本に国民皆保険が存在し「国が国民を守ろうとしていること」や経済的格差の相対的な小ささに感銘を受けたことを述べている（https://suumo.jp/journal/2024/01/25/200215/）。
4) しかしながら、NYTに取り上げられることによって山口市が観光地として大賑わいとなり、「観光公害」が発生するといった変化まで生じることも想定されるわけで――本文末尾で述べるようにそうはならなかったが――、NYTで紹介されることとModのこの思惑とは本来相容れないことであるように思われる。この点はModが述べているところからだけでは不明瞭なままである。
5) 山見議員は阿東徳佐在住で、山本議員は阿知須在住である。したがって、自身の生活実感に基づいた質疑を行ったものと言える。
6) 一般質問に限定した数値である。
7) 引用に際して漢数字を算用数字に修正している。
8) 本稿執筆時点で2024年11月までのデータしか公表されていなかったため、両年とも11月時点までの累積値を比較している。

［文献］

FNNプライムオンライン，2024,「【話題】NYタイムズ「行くべき場所」の山口市は今… 外国人観光客が1.5倍に移住した外国人も!その魅力とは」,（2025年1月8日取得, https://www.fnn.jp/articles/-/808370）.

Mod Craig, 2020, *Kissa by Kissa*, Tokyo: inuuniq (self-publishing).

———, 2024a ,“Yamaguchi City――My 'New York Times' Pick This Year”, （Retrieved July 30, 2024, https://craigmod.com/ridgeline/177/）.

———, 2024b, “Yamaguchi Once More”,（Retrieved July 30, 2024, https://craigmod.com/ridgeline/182/）.

日本政府観光局，2024,「訪日外客数（2024年11月推計値）」,（2025年1月8日取得, https://www.jnto.go.jp/statistics/data/_files/20241218_1615-1.pdf）.

岡本健，2013,『n次元創作観光――アニメ聖地巡礼／コンテンツツーリズム／観光社会学の可能性』北海道冒険芸術出版.

須藤廣，2017,「現代観光の潮流の中にダークツーリズムを位置づける」『立命館大学人文科学研究所紀要』

111: 5-36.
鈴木里奈，2023,「観光目的地としての『故郷』――故郷概念の変遷と真正性」『観光研究』35(1): 5-15.
多田治，2004,『沖縄イメージの誕生――青い海のカルチュラル・スタディーズ』東洋経済新報社.
The New York Times, 2024, “52 Places to Go in 2024”,（Retrieved July 30, 2024,https://www.nytimes.com/interactive/2024/travel/places-to-travel-destinations-2024.html）.
———, 2025, “52 Places to Go in 2025”,（Retrieved January8, 2025,https://www.nytimes.com/interactive/2025/travel/places-to-travel-destinations-2025.html）.
山口県，2024,「〇ニューヨークタイムズの記事を契機とした県の取組について」,（2024年7月30日取得, https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/170456.pdf）.
山口県議会，2023,「山口県令和5年産業観光委員会12月12日－07号」,（2024年7月30日取得, https://ssp.kaigiroku.net/tenant/prefyamaguchi/MinuteView.html?council_id=229&schedule_id=7&is_search=true）.
———，2024a,「山口県令和6年2月定例会02月27日－01号」,（2024年7月30日取得, https://ssp.kaigiroku.net/tenant/prefyamaguchi/MinuteView.html?council_id=237&schedule_id=1&is_search=true）.
———，2024b,「山口県令和6年2月定例会03月05日－03号」,（2024年7月30日取得, https://ssp.kaigiroku.net/tenant/prefyamaguchi/MinuteView.html?council_id=237&schedule_id=3&is_search=true）.
———，2024c,「山口県令和6年2月定例会03月07日－05号」,（2024年7月30日取得, https://ssp.kaigiroku.net/tenant/prefyamaguchi/MinuteView.html?council_id=237&schedule_id=5&is_search=true）.
山口市，2024,『市報やまぐち 5月1日号』山口市.
山口市議会，2022,「2022年09月13日：令和4年第4回定例会（3日目）本文」,（2024年7月30日取得, https://www.city.yamaguchi.yamaguchi.dbsr.jp/index.php/3546678?Template=doc-one-frame&VoiceType=OneHit&VoiceID=32405）.
———，2023,「2023年02月28日：令和5年第1回定例会（3日目）本文」,（2024年7月30日取得, https://www.city.yamaguchi.yamaguchi.dbsr.jp/index.php/3546678?Template=doc-one-frame&VoiceType=OneHit&VoiceID=33400）.
———，2024,「2024年02月16日：令和6年第1回定例会（1日目）本文」, 2024年7月30日取得, https://www.city.yamaguchi.yamaguchi.dbsr.jp/index.php/2446506?Template=doc-one-frame&VoiceType=OneHit&DocumentID=965）.
安村崇，2024,「ニューヨーク・タイムズ紙『2024年行くべき52カ所』の3番目に選出された『西の京・やまぐち』の魅力――室町時代の守護大名大内氏から始まった、『不易流行』と『寛容』の精神を持つ官民協働による山口市のまちづくり」『地方税』75(8): 83-92.
吉見俊哉，1992,『博覧会の政治学――まなざしの近代』中央公論新社.

所属：山口大学人文学部
E-mail：kuwahata@yamaguchi-u.ac.jp